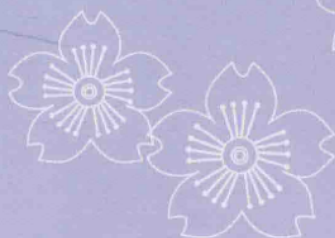
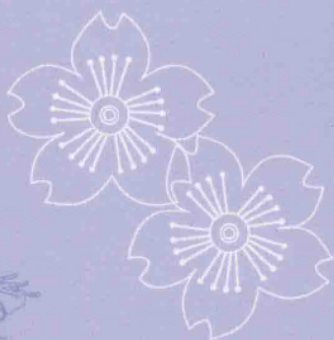


日文报刊泛读教程

■ 柯子刊 韩永 编著



WUHAN UNIVERSITY PRESS
武汉大学出版社

湖北省教育科学规划专项资助重点课题
『汉日话语组织对比与翻译研究』（2017ZA006）成果

日文报刊泛读教程

■ 柯子刊 韩永 编著

■ 王秋华 陈彪 审校



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日文报刊泛读教程/柯子刊,韩永编著. —武汉:武汉大学出版社,2018.7
ISBN 978-7-307-20352-5

I. 日… II. ①柯… ②韩… III. 日语—阅读教学—教材 IV. H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2018)第 145589 号

责任编辑:谢群英 责任校对:汪欣怡 版式设计:汪冰滢

出版发行:武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件:cbs22@whu.edu.cn 网址:www.wdp.com.cn)

印刷:北京虎彩文化传播有限公司

开本:787×1092 1/16 印张:12.25 字数:192千字 插页:1

版次:2018年7月第1版 2018年7月第1次印刷

ISBN 978-7-307-20352-5 定价:33.00元

版权所有,不得翻印;凡购买我社的图书,如有质量问题,请与当地图书销售部门联系调换。

前 言

本书是语言实践课系列教材之一，可供大专院校日语专业本科高年级使用，也可供日语专业第二学位学生使用。

在编著本书的过程中，始终坚持以“社会主义核心价值观”为指导，所选文章均为日本主流媒体、网络及各种杂志刊登内容，具有经典性、多样性、代表性、文学性和趣味性等特点。旨在通过教学激发学生阅读兴趣，让学生在掌握日语语言相关知识、提高对日语语言敏感度的同时，培养学生用他者视角了解日本社会风土人情、看待国内外时事热点，最终达到“他山之石、可以攻玉”之目的，用所学语言向日本、向世界传递中国声音，讲好中国故事。

本书共 90 篇文章，参考国内外已有教材编写体例，共分三大部分。

第一部分共六单元：文化、社会、教育、环境、科技、经贸和金融。每单元含精读文章和相关阅读资料，精读文章中，新出单词均以假名注音，文后给出单词解析，并附以思考问题。

第二部分为日文报刊中的经典文章，语言通俗易懂，词句精炼优美，适合学生在课后延伸阅读。

第三部分为编者结合平日授课，在前辈学者已有的知识基础上不断积累和总结的相关领域单词，有助于拓宽学生知识面，增强笔译和口译能力。

由于编者水平有限，时间仓促，书中错漏和不妥之处在所难免，企盼广大读者不吝指教。

编者

2018 年 5 月于武汉

目 次

一、本文

第一課 文化	003
1 球児の試合前挨拶、ルーツは仙台 野球反対論への対抗策	003
2 熊本城、復活のしゃちほこ 天守閣に設置始まる	005
3 20年、ともに歩んだ砲台跡の桜 和歌山・雑賀崎	006
4 宮崎駿監督とは対照的、「実験」に挑んだ高畑勲さん	008
5 日本画とは	009
6 成人の日 希望と不安と焦燥と	010
7 石牟礼さん 「近代」を問い続けて	011
8 天皇即位儀式 憲法の理念に忠実に	013
9 映画と社会 多様な出会いを大事に	014
第二課 社会	016
1 「警察支えるのは国民の信頼」警察庁長官が不祥事防止を指示	016
2 飲酒運転で死亡事故 米海兵隊員に懲役4年判決 那覇地裁	017
3 国際観光振興法が成立 出国税の使い道、3分野規定	018
4 無電柱化、新たに1400キロ 五輪へ向け国交省が計画	020
5 社会保障と税 「将来」見すえた議論を	021
6 煙い話	022
7 外国人住民 日本語学習の支援を	023
8 北陸の大雪 日頃から備える意識を	025
9 大震災から7年 「心の復興」への長い道	026

第三課 教育	029
1 グローバルな能力は国内でも不可欠! OECDが提唱	029
2 不登校・中退・ひきこもり 進学に再チャレンジする塾	031
3 学校の英語 土台の国語力を忘れるな	034
4 社会科が変わる!「暗記教科」から「最も使える教科」へ 新学習指導 要領	036
5 黒髪指導 生徒の尊厳を損なう愚	040
6 阪大入試ミス 組織の対応が遅すぎる	041
7 入試英語改革 東大の重い問題提起	043
8 道徳の教科化 矛盾の色ますます濃く	044
第四課 環境	046
1 再生可能エネルギーを「経済的に自立した主力電源」に	046
2 国際サシバ・サミット開催へ 絶滅おそれで保護進める	048
3 フィリピンの人気リゾート島 環境汚染で「閉鎖」へ	049
4 英 象牙取引に最長禁錮5年 世界で最も厳しい罰則へ	051
5 再エネの普及 送電線の「空き」活用を	052
6 原爆症認定 国は約束を忘れるな	053
7 地球温暖化 対策を加速させよう	055
8 森林経営管理 課題の検討を丁寧に	056
第五課 ディスカバリー	058
1 妊娠の可能性あれば「葉酸」の摂取を	058
2 老いても脳は生まれ変わる 米コロンビア大の研究	059
3 「IT界の雄」が屈服 フェイスブック情報流出で陳謝も…議会「謝罪では 済まない」	061
4 まるで本物 サンゴ礁を泳ぐ“魚ロボット” MITが開発	063
5 インフル流行 正しい知識で備えよう	065
6 有人月探査 参加ありき、ではなく	066
7 科学者の姿勢 湯川日記の示唆に思う	068
8 研究不正 なぜ起きる、どう防ぐ	069
第六課 経済・金融・貿易	071
1 ドイツ銀トップ交代 経営不振で事実上解任	071

2	“肉ブーム”も物価上昇に一役? 内閣府が分析	072
3	宿泊税、入湯税引き上げ… 地方自治体、訪日客で税収増狙う	074
4	再エネ主力化 費用低減、大きな壁 原発の議論求める声	076
5	日銀総裁 給与の増加で緩やかな物価上昇と期待	077
6	アマゾンに対抗 楽天とビックカメラが共同でネット通販	078
7	TPPと米国 復帰へ保護主義見直せ	080
8	神戸製鋼不正 体質を一新できるのか	081
9	春闘 賃上げ、さらに進めよ	083
10	株価上昇 日銀の買い入れ再考を	084
11	所得税改革 再分配強化の道筋描け	085
12	高齢化と年金 不安に応える改革こそ	087

二、関連読解

1	学び直し 大学の針路探る機会に	091
2	子育て支援 「すべて無償化」の前に	092
3	ヘイト規制 差別許さぬ意識深化を	093
4	金融危機 20 年 新たな課題へ対応急げ	095
5	鉄道の老朽化 安全の維持に万全を	096
6	大学改革 目先の利益傾く危うさ	098
7	新大学入試 考える授業への転換を	099
8	NHK 判決 公共放送の使命を常に	100
9	伊方差し止め 火山国への根源的問い	102
10	生活保護費 引き下げ方針、再考を	103
11	のぞみ亀裂 安全優先の徹底を	104
12	北海道沖地震 「想定外」を減らそう	106
13	災害大国に暮らす 教訓生かし、自衛する時	107
14	2017—2018 聞けなかった声、を	110
15	タイブレーク 選手の健康が一番だ	113
16	阪神大震災 体験に学び、備えよう	114
17	札幌の火災 困窮者に「住」の保障を	115
18	外国人労働者 柔軟思考で受け入れを	117
19	平昌→東京 五輪への思いをつなぐ	118
20	パラリンピック 共に生きる社会に向け	119

21 福島原発被災地 まちの再生、探り続ける 121

22 大震災からの復興 教訓に学び新たな発想で 123

23 福島第一廃炉 責務の重さを忘れるな 126

24 大学生と読書 又吉さんに背中押され 127

25 公害病半世紀 患者の苦痛を忘れまい 129

26 福島の避難者 息長く支援の手を 130

27 NPO 法 20 年 「多様な市民」をさらに 132

28 働き方改革 労働者保護に焦点絞れ 133

29 スポーツ不祥事 常識との溝、深い不信 134

30 日本原電支援 東電に資格があるのか 136

31 海賊版サイト 拙速、危険な政府対策 137

32 熊本地震 2 年 「在宅被災者」を支える 138

33 環境基本計画 「言いつ放し」にするな 140

34 奨学金破産 返せる仕組みへ工夫を 141

35 本四架橋 30 年 負担の大きさを忘れるな 142

36 社会保障推計 給付と負担の再構築を 144

三、関連単語

一、文化 149

二、社会 155

三、教育 159

四、環境 164

五、ディスカバリー 169

六、経済貿易 174

七、金融 178

八、平和と繁栄 183

参考文献 189

一、本文

第一課 文 化

1 球児の試合前挨拶、ルーツは仙台 野球反対論への対抗策

全国高校野球選手権大会は今夏、100回記念大会を迎える。試合前、両チームが向かい合って並び、審判団とともに脱帽し一礼するのが、第1回大会以来おなじみの光景だ。この「試合前(後)挨拶」のルーツが仙台にあることを、地元の野球史家・伊藤正浩さん(45)が確かめた。

試合前挨拶を提唱したのは、東北大の前身の一つ、旧制第二高校だった。話は1911(明治44)年にさかのぼる。

仙台市青葉区の二高グラウンドで、11月3日から3日間、同校主催による第1回東北六県中等学校野球大会が開かれた。旧制仙台一中、仙台二中、盛岡中など6校が参加。伊藤さんによれば試合前挨拶は、このとき最初に行われたという。

二高は、明治中期に米国人教師が野球を伝え、当時は東北の野球普及の中心的存在だった。伊藤さんは様々な資料をあたり、二高野球部マネジャーだった三鬼隆(後に八幡製鉄社長)や応援団長の前田亀千代(同・京都弁護士会長)が、この大会で試合前挨拶を始めたと言っているのを、古い回想録やOB会誌の中に見つけた。

では、どんな背景で始まったのだろう。

日本ではそのころ、学生の間で盛んになっていた野球を巡り、勉学がおろそかにな

だらく
り墮落する、成長にもよくない、といった反対論が起きていた。

東京朝日新聞は1911年8~9月、「野球と其害毒」と題する連載記事を掲載。東京の一高校長だった新渡戸稲造が「野球は賤技なり」「相手を常にペテンにかけよう、塁を盗もうなど、神経を鋭くしてやる遊びである」と述べ、学習院院長の乃木希典が「馬術、弓術、柔道などは奨励するが、野球は必要ならざる遊戯。対校試合を禁止した」と語るなど、反対キャンペーンを繰り広げた。

こうした中、大会開催に奔走していた二高野球部員は、学生野球の健全さをアピールしようと腐心したらしい。「礼に始まり礼に終わる武道の美德を、野球に持ち込もうと思いついた」と、伊藤さんはみる。

仙台の中等学校大会のひと月後、二高は京都で開かれた旧制高校の全国大会にしゅつじょう出場。ここでも同校は試合前挨拶を提案し、実現させている。4年後の15年には大阪朝日新聞社が初めて開いた全国中等学校優勝野球大会(現在の夏の甲子園大会)が採用。「高校野球百年」(時事通信社)によると、理由は「本大会は職業化したアメリカ野球の直訳ではなく、武士道の精神を基調とし、心身の鍛錬を目的として行うものであるから」だったという。

その後、甲子園から全国に広がり、現在では大学野球を含むアマチュア野球の日本独特のスタイルとして定着。仙台で始まった時は試合前だけだったとみられるが、試合後も加わっている。

仙台在住の伊藤さんは中学で野球を経験。会社勤めのかたわら、史料をコツコツ集めるざいや在野の研究者だ。「昔から仙台は野球が盛んで、全国に広がるような習慣も残していた。現在・過去・未来を結ぶものとして地域の野球史を伝えたい」と話している。
(編集委員・石橋英昭)

【注釈】

御馴染み(おなじみ)[名]: 熟识。老相识。

マネジャー[名]: 经理。

疎か(おろそか)[形動]: 疏忽, 不认真, 草率。

ペテン[名]: 欺骗; 欺骗手段。例: ペテンにかける。上当, 受骗。

奔走(ほんそう)[名・自サ]: 奔走, 张罗, 斡旋。

腐心(ふしん)[名]: 绞尽脑汁, 煞费苦心。

アマチュア[名]: 业余爱好者, 业余艺术家, 业余运动员。

傍ら(かたわら)[名]: 旁边; 一边……一边……。例: 仕事の傍ら勉強する。边工作边学习。

📖【思考問題】

1. 球児が試合開始前に交わす挨拶にどんな背景がありましたか。
2. ある地域の〇〇史を伝えていくためには、どうしたらいいですか。

2 熊本城、復活のしゃちほこ 天守閣に設置始まる

2016年4月の熊本地震で大きな被害を受けた熊本城(熊本市中央区)で6日、復元したしゃちほこの設置作業が始まった。今後、天守閣にしっかりと固定するための調整を続け、据え付けは28日にも完了する予定だ。

時折強い雨が降るなか、作業員らが、2体のしゃちほこの尾筒や胸びれにロープを巻き、慎重にクレーンで引き上げた。大天守最上階近くの高さ約40メートルの足場まで運んだ後、^{やね}屋根に固定するために、突き出た柱としゃちほこに開けた穴がぴったり合うように削^{けず}るなどした。

熊本城は地震により、天守閣の^{かわら}瓦やしゃちほこが落ちたほか、石垣が約50カ所で崩落する被害を受けた。市は19年度中に大天守の外観を^{ふつきゅう}復旧させる計画を立てている。最上階の瓦ぶきやしっくい^{こてい}による固定がほぼ終わったため、今回の設置作業に入

った。(神崎卓征)

📖【注釈】

しゃちほこ[名]: (城郭、屋脊两端的)兽头瓦, 虎头鱼身的怪兽。

据え付け(すえつけ)[名]: 安装, 固定。

時折(ときおり)[副]: 有时, 偶尔。

胸鰭(むなびれ)[名]: 胸鰭。

クレーン[名]: 起重机, 吊车。

柱(はしら)[名]: 支柱, 顶梁柱。

足場(あしば)[名]: 立足处; 脚手架。

突き出る(つきでる)[自一]: 突出, 伸出。

崩落(ほうらく)[名・自サ]: 崩塌; 暴跌。

瓦葺き(かわらぶき)[名]: 瓦屋顶。

漆喰(しっくい)[名]: 砂浆, 灰泥。

📖【思考問題】

1. しゃちほこの役割は何でしょうか。
2. 地震とどう付き合ったらいいでしょうか。

3 20年、ともに歩んだ砲台跡の桜 和歌山・雑賀崎

かつて万葉集にうたわれた和歌山市の^{さいかうら}雑賀浦。その北端に「トンガの鼻」と呼ばれる岬がある。和歌山市雑賀崎に住む中井洋子さん(61)たちはある1本の桜を^{にじ}丹精込めて育ててきた。

桜の周囲は「雑賀崎^{だいば}台場」。幕末、紀州藩が外国船の^{らいこう}来航に備えて築いた^{ほうだいあと}砲台跡

で、住民らが1998年から整備を続けてきた。名前は岬の形が「唐^{とう}鋏^{くわ}」と呼ばれる鋏に似ているからとも言われる。02年には地元の魅力を伝えようと「トンガの鼻自然クラブ」を結成。密^{みつ}生^{せい}した背丈ほどの草木を切り開き、新たな石垣^{いしがき}を見つけたこともあった。宝物^{たからもの}を発見したように手を取り合った。10年には県指定文化財の記念物(史跡)に指定された。

桜は一体どこから来たのかわからない。「鳥が種を運んだのかな」と中井さん。肥料をやり、約20年で高さ10メートルほどに成長。こんもりとした樹形^{じゅけい}にぎっしりと花をつけた。草刈りを終え、甘い香りが漂う木の下ベンチに腰掛けては、海に沈む夕日^{ゆうひ}を見た。

20年間伴走^{ばんそう}してきた桜の木。今では活動を見守ってくれる「心のふるさと」のような存在になった。1本の桜が縁^{えん}でつながった、仲間と共に歩いていく。(矢木隆晴)

【注釈】

岬(みさき)[名]: 海角, 岬角。

丹精(たんせい)[名]: 努力, 竭力。

鋏(くわ)[名]: 镐形鋤頭。

密生(みつせい)[名・自サ]: 丛生。

こんもり[副・自サ]: (樹木)繁茂。

ぎっしり[副]: 满满地, 满满当当地。

伴走(ばんそう)[名・自サ]: 陪跑。

縁(えん)[名]: 缘分, 机缘。

【思考問題】

1. 文中にある一本の桜の木は一体どこから来たのでしょうか。
2. 桜でつながる人々ということについてどう考えていますか。

4 宮崎駿監督とは対照的、「実験」に挑んだ高畑勲さん

丸っこくてシンプルな「ハイジ」。ほお骨が張ったりアルな「おもひでぼろぼろ」。
^{あら}粗い鉛筆の描線が走る「かぐや姫」。一見スタイルは異なるが、一貫してアニメーションならではの「実感」を追究した。「絵を『よすが』とし、その向こうに『ほんもの』を感じてもらえるのがアニメーション」を持論とした。

多様なスタイルは、「同じことはしたくない」と新作の度に「実験」に挑んだ結果だ。
 自分のスタイルを崩さず深めていく宮崎駿監督とは ^{たいしょうてき}対照的 だった。

初監督映画「太陽の王子 ^{おうじ}ホルスの大冒険 ^{ほうけん}」で、服、生活道具、建物の構造まで緻密に作り上げた。「実感」を求めるが故だ。それらの設定を考え描いたのは、東映動画入社3年目の宮崎さん。右腕として「ハイジ」「三千里」を一緒に作り、「世界をありありと作り上げる」高畑の手法を血肉とした。

^{だいひょうさく}代表作「火垂るの墓」は宮崎監督の「となりのトトロ」と2本立て公開だった。生活と生命の確かな ^{じっかん}実感の上に、^{たいしょうてき}対照的 な花を咲かせた2作だった。(小原篤)

【注釈】

丸っこい(まるっこい)[形]: 圓圓的。

頬骨(ほおぼね)[名]: 顴骨, 頬骨。

ぼろぼろ[副]: 扑簌。

描線(びょうせん)[名]: 用线勾勒的轮廓。

よすが[名]: 依靠, 凭依。

緻密(ちみつ)[形動]: 细致, 细腻, 周密。

故(ゆえ)[名]: 理由, 缘故。

東映(とうえい)[名]: 「東映株式会社」的简称。

右腕(みぎうで)[名]: 右臂; 可信赖的人, 好帮手。

血肉(けつにく)[名]: 血肉, 骨肉至亲。

📖【思考問題】

1. 高畑勲監督と宮崎駿監督との区別はどこにあると考えていますか。
2. 高畑勲監督は作品を通して何を伝えようとしているのでしょうか。

関連読解文:

5 日本画とは

日本画とは何か? しばしば話題にのぼる問いかけだ。その都度、納得できない思いを抱いてきたと山崎さんは言う。岩絵の具をはじめ支持体として用いる紙や絹、さらに膠^{にかわ}など独特な素材、技法を前提とするのは紛れもない。ただその違いだけなのか?

近代以後、西洋から移入され、盛んになった油絵(西洋画)に対して、既存の絵画を本画と呼んだなど制度上のことと片付けてよいのか? もちろんそれらも大切な視点だ。だが素材や技法、制度、あるいは市場など、まるで外堀をつつくような印象がどこか否めないようにも思う。

日本の風土、独特の環境がはぐくんだ日本の絵とほかの国の絵を隔てる特徴は? それも肝心な表現の中に特徴を見出し、新たな創造のヒントにしたい。その願いを胸に中心となって企画した一連の試みが、自分を含めて4人が順に個展を開き、最後に全員が集まってグループ展を開催する「日本画の手法~充滿する四つの時間」だ。

皮切りに始まった自らの個展に並ぶ新作が『即今』だ。主として青、黄、白には配色されたこの作品は、古代中国で生まれた陰陽五行に由来すると言う。「く」の字に見